

社会科学の哲学と規範の理論

2008年1月26日

瀧澤弘和

VCASI & 多摩大学

社会科学の哲学

- これまで伝統的に、社会科学と自然科学とでは取り扱う対象が異なることに着目した議論がなされてきた。
 - 自然科学の対象と社会科学の対象の相違を特徴づけた上で、それに応じて方法論も異なるという考え方。典型的にはWinch (1958) やウェーバー、ギアツなど。
 - 以下、そのモダンな例としてサールの議論をしてみる。

サールの議論(1)

- Searle (1998)は次のような分類を行っている。
- 存在論的に客観的vs.主観的　世界に存在する実体の「存在の様式(mode of existence)」に関係。
 - 存在論的に客観的: 観察者と独立に存在している。
例: 山, 氷河, 力, 質量, 重力, 太陽系, 光合成, 水素原子など。
 - 存在論的に主観的: 観察者の主観によってのみ存在している。
例: 痛み, 痒み, 思考, 貨幣, 財産, 政府, フットボール, その他のあらゆる制度など
- 認識論的に客観的vs.主観的　言明(statement) に関する分類。
 - 認識論的に客観的: その真偽が観察者の主観から独立である。
例: 「レンブラントは1609年に生まれた」。
 - 認識論的に主観的: その真偽は, 観察者の態度, 好み, 評価によって変わる。
例: 「レンブラントはルーベンスよりも良い画家だ」。

サールの議論(2)

- 素粒子, 液体, 化学物質などは「存在論的に客観的」であり, これに対する命題は「認識論的に客観的」である。これを論ずるのが自然科学。
- 貨幣, 財産, 国家, 社会などはいずれも「存在論的に主観的」であるが, それに対する命題は「認識論的に客観的」でありうる。これを論ずるのが社会科学である。
- こうして, サールは社会科学が客観的でありうるための地盤ならしをしている。
 - サールのいう「存在論的に主観的」な現象は, 「志向性 (intentionality)」（動機, 信念, 欲求など）に関連したものなので, 志向的なものに用いられる語彙によって記述される。

社会科学の諸分野の状況

- しかし今日の社会科学に起こっていることは、同じ現象が両方のカテゴリーに同時に属していることから、同一の現象に対して異なるアプローチからの説明がなされるようになっていると見なすことができるのではないか。
 - すなわち、存在論的には異なっていたとしても、「存在的」には共通しており、異なる存在論に応じて異なったアプローチの議論がなされつつある。
 - 「心的なものと物的なものは、存在論を共有するが、私が正しいとすれば、分類概念を共有してはいないのである」(Davidson, 2004, p.157)。
- 同一の現象を異なる視点から分析することがますます頻繁になっていることが、様々な混乱を惹き起こしている。
 - たとえば、進化心理学者たちによるSSSM(Standard Social Science Model: 標準社会科学モデル) 批判など(Tooby and Cosmides, 1992)。

方法論的個人主義をめぐって

- マックス・ウェーバーの「方法論的個人主義」 社会科学において、
個々人の行為(“action”であって”behavior”ではないことに注意)を中心
とした説明を行わなければならないのは、それがわれわれにとって理解
可能であるからであるというのがウェーバーの主張(Heath, 2005).
 - 意思決定理論, 伝統的経済学, 理解社会学など. ここでは, 集団的なものが
それ自体として目的をもった行為を行うとするのではなく, 個々人の行為から
それを説明しようとする事で多くの成果をあげてきた. とりわけ, 19世紀に
見られたようなタイプの集団的行為の問題における誤謬回避に役立ってきた.
- しかし今日では, 個々人の行為を分析の単位として設定する方法論的個人
主義から乖離した社会科学的説明の有用性も多く知られるようになってきた.
 - 犯罪の統計学.
 - 無意識(subintentional) レベルにおけるバイアスの行動への影響.
 - 進化論.
- 以下, 認知心理学と認知心理学の哲学, 進化論の例をあげる.

Clark (1997) の議論(1)

- 脳・身体・環境の統一的理解を強調。個々の行動が環境を作り、環境に対する変更があらたな行動の引き金となり、さらに環境を修正していくという間接的な創発(indirect emergence) を重視。
- 例: 白アリの巣作り(Clark 1997, p.75).
 - 最初に、すべての白アリたちが泥の塊を作り、ランダムに置く。それぞれの泥の塊には化学的痕跡が付加されていて、白アリは化学的痕跡が最も強い場所に泥の塊を落とすことを好むようになっているので、新しい泥の塊はすでにある泥の塊の上に落とされることになる。これが化学的痕跡をさらに強化する。
 - 最初にランダムに配置した結果、複数の柱が形成される。2つの柱が近接していれば、隣の柱から出る化学的誘因物質の作用によって、白アリたちは柱の互いに面している側に泥を加えていく傾向を持つようになる。
 - 最終的には、柱の天辺が傾いてくっつき、アーチが形成されることになる。他の同様にstigmergicな行動によって、複雑な部屋やトンネルが形成される。
- このようなアルゴリズムをStigmergic Algorithm と呼ぶ。
 - Stigmergy = Stigma (Sign) + Ergon (Work)
 - その意味は「作業(work) をさらなる仕事のシグナルとして用いること」である。

Clark (1997) の議論(2)

- クラークは、Denzau and North (1994) や Gode and Sunder (1993) を引用し、市場を含む人間が創る諸制度をこのようなものとして捉えることを提案する。言語も同様に stigmergic に発生してきたとする。
- 人間と他の動物との違い：
「このことが当たらずといえども遠からずならば、人間の脳は、断片化し、特定の目的に特化し、行為志向であるような他の動物や自律的ロボットが持つ器官とそれほど違いがない。しかし、われわれは1つの決定的に重要な点で優れている。すなわち、われわれは、われわれの物理的・社会的な世界を構造化することによって、これらの手に負えない資源から複雑で一貫した行動を絞り出しているのである(Clark, 1997, p.180)」。
- 創発の重視はDurkeimも強調している。
「私は、社会生活はそれに参加している人々がもつ観念によってではなく、意識によっては知覚されないより深い諸原因によって説明されなければならない、というこの考え方を非常に実り多いものとする。そしてまた私は、これらの原因はもっぱら諸個人が連合して集団となる仕方の内に求められるべきだと思う。このようにしてのみ歴史学は科学になり得るのであり、社会学自体もまた存在し得るのである。」(Winch (1958) より引用)

下條信輔(1999) の議論

- 知覚的・認知的「錯誤」は、ある種の支配的環境に対する適応(ヒューリスティック)として合理的に説明できるとする。
- 「物理世界」「環境世界」。
- 人間の脳を中枢部分と周辺部分に分離する試みは、今まで失敗してきた(「ホマンキュラス問題」)。これは志向性に基づく概念で脳そのものを研究することの困難を示している。
- 人間の脳は、その基本設計が遺伝による一方で、初期の発達の環境に応じて可塑的に変化し、さらに過去の経験が影響を与えるなど、「来歴」に深い影響を受けており、それを単独で(in isolation)分析することは困難である。

進化論の影響

- 進化的理論の影響も大きい。この場合のドライビング・フォースはreplicationのダイナミクスである。
 - 進化生物学においては、選択の単位はgeneであり個体ではない(ドーキンス)。
 - ミーム理論においては、選択の単位は“meme”である(Stanovich, 2004)。
 - 文化進化論においては、選択の単位は“cultural variants”である(Boyd and Richerson, 1985, 2005)。

方法論的多元主義へ

- 今日の状況で総合的な社会科学を考えるには、方法論的に多元主義的にならなくてはならないのではないだろうか。
 1. 人間の行為を単位とした従来型の分析。さらに一步踏み込んで、「心の哲学」におけるように志向性の性質を手掛りにした分析。
 2. 人間と制度(環境)とのインタラクションに関する分析(社会あるいは制度のメカニズムそのものが持つ性質や、それが人間に対してどのような「環境世界」を構成しているのか)。
 3. 進化理論的分析。

異なるアプローチ，異なる記述言語

- 人間行動，社会現象をどのようなアプローチから見るかによって，記述言語は異なってくるし，異なる記述言語間の翻訳は非常に困難である。
 - 人間の行為を志向性に基づいて理解する立場には，その人間の行為が「合理的」であるという前提で理解するという制約が生じる．それ以外の仕方では，理解が不可能となる(デイヴィドソン)．
 - 「私が思うに，命題的態度を用いた心理的説明と，物理学や生理学のような科学に見られる説明とのあいだには，還元不可能な相違がある」(Davidson, 2004, p.170)．
- しかしこのことは，後に見るように，異なるアプローチで得られた知見の統合が無意味だということの意味しない．
- ちなみに，コネクショニストたちからの素朴心理学(folk psychology) に対する厳しい批判に関わらず，信念や欲望などに基づいた記述は不可欠であり，生き残り続けることになるだろう．そもそもわれわれはこうした記述の仕方を用いてコミュニケーションを行い，社会を構成しているのだから．
 - 「合理的選択理論が第1 に，また最優先で果すのは，表現的な役割である．それは，われわれがある信念と欲求をある選択問題に作用させるときにインプリットに行うコミットメントとともに，われわれが実践的熟慮の構造をより明瞭に言明することを可能にするのである」(Heath,2008, p.107)

規範(義務的制約)の話がなぜ興味を惹くとともに、難しいのか。

- 「規範」とは：
 - 責任の構造(structure of accountability)を伴う点で「慣習」と異なる。すなわち、関連する規範との関係で行為を正当化する必要性和、規範的期待に一致しなかったときにサンクションを受ける可能性がある (Heath, 2001, p.152)。
- 方法論的基礎を異にする上記の3つのアプローチのそれぞれからアプローチがなされ、それぞれに意味のある洞察が得られている。
 - 個々の人間の志向性の構造による説明(Searle, 1995)。
 - 社会や制度のメカニズム(Denzau and North, 1994)。
 - 進化理論による説明(Tooby and Cosmides, 1992)。
- しかも、どの1つのアプローチだけでも規範の持つ「本質」を十分に説明できないように思える(ヴィトゲンシュタインの私的言語の議論)。たとえば、もっとも基礎的な制度とも言える「言語」。
- したがって、方法論的に異なるアプローチを許容し、それらを補完的なものにしていく必要がある。

Heath (2008) のアプローチ(1)

- 上の3つのアプローチの方法論的基盤を適切に位置付けながら、そこで得られた(実証的) 知見を整合的にまとめ、なおかつそれを最終的には志向性による合理性モデルを用いて説明しようとしたものとして評価できる。
- ホブズのように、信念、欲求などの志向的状态の完全なセットを持った個々人が社会的制度を構成していくのではなく、現実にも論理的にもその逆であるとする。
- Brandom (1994, 2000) の「規範のプラグマティズム的概念 (pragmatist conception of norms)」の立場から、実践にインプリシットな仕方でプリミティブな正しさという概念が発生してきたこと、それがルールや原則の明示的な定式化に先立つことを説明する。

Heath (2008) のアプローチ(2)

- 一方, 言語行為は, 「理由を与えたり, 求めたりするゲーム(game of giving and asking reasons)」におけるコミットメントとして「合理性」を獲得する。このために, 人間の行為は「合理性」に服さざるを得ないと考えている。
- 他方, 人間が文化依存的たらざるを得ないことは, 進化プロセスの産物である。人間が文化依存的になるプロセスは, 同時に言語を獲得するプロセスでもある。こうして, 価値づけはかなりの程度その個人が生まれ育った社会・文化に依存したものとして内面化されることになる。
- 従来, 自己利益に反する義務的制約に従うことは単に「非合理」とされてきたが, 「合理性」はそこで前提とされているような「道具主義的な実践的合理性」でなければならない哲学的必然性はない。
- 人間は文化依存的・かつ規範的に価値を形成するのだから, 行為の結果だけに価値を帰着する帰結主義ではなく, 行為そのものにも価値づけを行う選好(定言的選好: categorical preference)を導入し, 両者を組み合わせた合成的効用関数(composite utility function)のモデルがあってもよいとし, そのようなモデルを提案する(Jeffrey (1983) はつとにそのようなモデルを提案していたようである)。

ヒースのアプローチに対する議論

- ヒースの論理: 規範的ルールの中には文化依存的な深層部分におけるものと、個々人が志向的状态を確立した後に成立するルールとに分類できる。
 - 伝統的なゲーム理論が説明しようとしてきたルールは、後者のルールと考えてよい。
 - これに対して、前者の部分をゲーム理論が分析できるかについては未知である。Matsui (2007) の帰納的ゲームは、経験による信念の形成を明示化するという意味で、前者のモデル化の試みと見なすことができる。
- ヒースは異なる方法的基礎を持つアプローチを接合しているが、それは同時にさらなる疑問をも生み出す。たとえば、さまざまな意味を持ちうる「合理性」という言葉の理解である。
 - たとえば、人間が推論や意思決定の実験で示すエラーやバイアスをどのように説明するかという観点から、Evans and Over (1996) は $rationality_1$ (個人的合理性) と $rationality_2$ (非人格的合理性) との区別を試みている。
 - 道具主義的合理性は「動物なみ」として、人間の合理性はそれ以上の内実を持つとする議論も多い (Nozick, 1993; Searle, 2001)。
- ちなみに、ジョン・サールの議論は、志向性の構造からすべてを説明しようと試みて、制度的現象はすべて「X が文脈C においてY と見なされる (X counts as Y in C)」という形式をとっている。この議論は syntactical で一般的だが、志向性がどのように成立するかに関する説明は一切ない。このため、制度変化のことを考えようとするときに、道具としては不十分になるように思われる。

参考文献(1)

- Boyd, R., and P. Richerson (1985): *Culture and the Evolutionary Process*. Chicago, IL: The University of Chicago Press.
- Boyd, R., and P. Richerson (2005): *Not by Genes Alone: How Culture Transformed Human Evolution*. Chicago, IL: The University of Chicago Press.
- Brandom, R. (1994): *Making It Explicit*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Brandom, R. (2000): *Articulating Reasons*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Clark, A. (1997): *Being There*. Cambridge, MA: The MIT Press.
- Davidson, D. (2004): *Problems of Rationality*. Oxford, UK: Oxford University Press, (邦訳:『合理性の諸問題』, 金杉武司, 塩野直之, 鈴木貴之, 信原幸弘訳, 春秋社, 2007).
- Denzau, A., and D. North (1994): "Shared Mental Models: Ideologies and Institutions," *Kyklos*, 47, 3–31.
- Evans, J., and D. Over (1996): *Rationality and Reasoning*. East Sussex, UK: Psychology Press.
- Gode, D., and S. Sunder (1993): "Allocative Efficiency of Markets with Zero-Intelligence Traders: Market as a Partial Substitute for Individual Rationality," *Journal of Political Economy*, 101, 119–137.
- Heath, J. (2001): *Communicative Action and Rational Choice*. Cambridge, MA: The MIT Press.

参考文献(2)

- Heath, J. (2005): "Methodological Individualism," Stanford Encyclopedia of Philosophy.
- Heath, J. (2008): *Following the Rules*. Oxford, UK: Oxford University Press, in press.
- Jeffrey, R. (1983): *The Logic of Decision*. Chicago, IL: The University of Chicago Press, 2nd ed.
- Matsui, A. (2007): "An Axiomatic Approach to a Theory of Man as a Creator of the World," mimeo. The University of Tokyo.
- Nozick, R. (1993): *The Nature of Rationality*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Searle, J. (1995): *The Construction of Social Reality*. New York, NY: The Free Press.
- Searle, J. (1998): *Mind, Language and Society*. New York, NY: Basic Books.
- Searle, J. (2001): *Rationality in Action*. Cambridge, MA: The MIT Press.
- Stanovich, K. (2004): *The Robot's Rebellion*. Chicago, IL: The University of Chicago Press.
- Tooby, J., and L. Cosmides (1992): "The Psychological Foundations of Culture," in *The Adapted Mind*, ed. by J. H. Barkow, L. Cosmides, and J. Tooby. New York, NY: Oxford University Press, pp.19–136.
- Winch, P. (1958): *The Idea of a Social Science and its Relation to Philosophy*. London, UK: Routledge & Kegan Paul, (邦訳:『社会科学の理念: ヴィトゲンシュタイン哲学と社会研究』, 森川真規雄訳, 新曜社).
- 下條信輔(1999):『意識とは何だろうか』. 講談社現代新書.